

梅毒治療薬のサルバルサン創製

秦 佐八郎

2019 年春、第 30 回日本医学会総会の医学史展（2019 年 3 月 2 日～4 月 28 日）「その扉を開いたのは誰か？」が開催された。福田真人氏（名古屋大学名誉教授）の開会特別講演「病気の歴史：結核と梅毒」は、医学研究の発展から医療への応用について、2 つの病気の歴史を題材に解説し興味深いものだった。

かつて、ヴィーナスの病と言われた性病（現在の性感染症）の 1 つとして数えられる梅毒は、梅毒トレポネーマに感染し発症する病気で、ルネッサンス時代には美男美女の病として語られたことがあった¹⁾。わが国の川柳にも「鷹の名にお花お千代はきついこと」（売春婦にお鼻落ちよとはたいへんだ）と読まれている¹⁾。

きらびやかな夜の世界に黒子のように潜む梅毒。それがじわじわと庶民の生活まで侵していき、親の病気が子に祟る感染症の 1 つが梅毒である²⁾。

秦佐八郎（1873～1938 年）は、島根県益田市美都町の山根道恭・ヒデの 8 男として生まれ、14 歳の時に医家の秦徳太・ツタの養子になる（写真 1）。岡山第三高等学校中学部医学部（現在の岡山大学医学部）卒業後、1 年間志願兵役を務め、岡山県立病院に勤務する。その後上京し、大日本私立衛生会の伝染病研究所に入所、所長の北里柴三郎（1853～1931 年）に師事している。北里がコッホ（Robert Koch：1843～1910 年）のもとで研究し、破傷風菌の純粋培養に成功し、さらに抗毒素を発見したように、秦もドイツに留学し、国立実験治療研究所でエールリッヒ（Paul Ehrlich：1854～1915 年）の助手として梅毒に対する特効薬の研究をする（写真 2）。

砒素製剤 606 号と名づけられた試料（砒素化合物ジオキシ・ジアミド・アルゼノベンゾール）の効果と毒性を動物実験で確かめ、1910 年に 606 号物質に梅毒特効薬としての効果を発見する。ドイツの製薬会社ヘキスト社は、この薬をサルバルサン（ラテン語で Salvarsan は「救う」の意味）と名づけ製造販売した²⁾。

第一次世界大戦が勃発した 1914（大正 3）年当時、わが国がほとんど輸入に頼っていたドイツからの医療品が途絶え、特に医薬品の国産化は焦眉の課題となる。サルバルサンの国産化についても、鈴木梅太郎（1874～1943 年）等の協力を得て「アルミサノール」の名で三共商店（現・第一三共株式会社）から発売されたの



写真 1 秦記念館外観（島根県益田市）

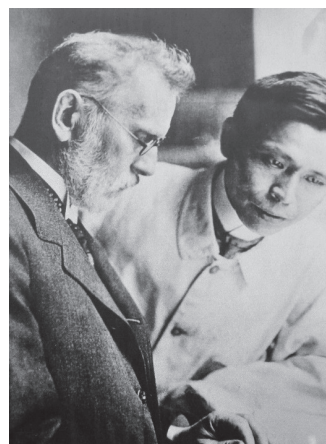


写真 2 エールリッヒと秦（秦記念館入口の案内板より）

が、わが国初の駆梅剤である³⁾。サルバルサンの開発によって、梅毒の根本療法が開発され、この薬は戦後ペニシリンをはじめとする各種抗生物質が開発されるまで、梅毒治療の中心となった。

日本化学療法学会は、秦の功績をたたえ「志賀潔・秦佐八郎記念賞」を設けて顕彰している。

参考資料

- 1) 福田真人, 医学史よもやま話, 第 30 回医学会総会開会特別講演配布資料 (2019)
- 2) 鈴木 昶, 日本医科列伝, 350-354, 大修館書店 (2013)
- 3) 諸澄邦彦, ビタミンの発見 鈴木梅太郎, *Isotope News*, No.756, 49 (2018)

（日本診療放射線技師会 諸澄邦彦）